

紙・パルプ産業を生んだ一大土木事業

―四国中央市：疏水・製紙・発電が形づくる産業景観―

Major civil engineering project generates paper and pulp industry
―Shikokuchuo City: Industrial landscape formed by canal, papermaking, and power generation―

岡田 昌彰 正会員 近畿大学理工学部社会環境工学科教授

日本各地の工業都市において、大規模な工場や発電所などの産業施設の立地によって特徴的な産業景観^{テクノスケープ}が形成されている。その中には地域の心象風景へと昇華あるいは個性的な地域文化を生み出している事例も少なくない。産業景観は地域産業史や自然・人文地理的条件など地域特性の反映体であり、まさに工業都市におけるアイデンティティーの重要なアイコンとして評価できる。

本稿では、戦後の一大土木事業である銅山川疏水事業によって姿を現した紙・パルプ工業都市、愛媛県四国中央市の産業景観に注目してみたい。

紙のまち、四国中央市の胎動

―伝統的紙漉きと近代の機械化―

四国中央市は、瀬戸内海工業地域の一角、文字通り四国の中央部に広がる宇摩平野の中心都市であり、大王製紙株式会社を中心とする紙づくりの町として知られてきた。1960年代、当地の臨

む燦灘^{ひつちなん}の沿岸に近代港湾とともに広大な臨海工業

地帯が造成され、大王製紙をはじめ丸住製紙、愛媛製紙など紙・パルプ工業を中心に重化学工業が集積し、現在に至るまで壮大な産業景観が形成されている(写真1)。大王製紙三島工場が位置する地区には現在も「三島紙屋町」の行政地名が残る。

当地においては宝暦年間より、自生するコウゾ・ミツマタ、そして金生川^{きんせいがわ}の清澄な水を原料として和紙が漉^すかれていた。洋紙の導入される明治以降も「紙聖」の異名をもつ開明的製紙技術者、篠原朔太郎(1865―1952年)により、洋紙製造用の叩解機^{ビーター}(原料を細かく砕く機械)、その排熱を利用した回転式三角型蒸気乾燥機などが導入され、和紙の生産がしばらく存続している点は興味深い。

銅山川疏水事業―戦後飛躍の原点

当地における紙・パルプ産業の飛躍的発展の背景には戦後の大規模な土木事業があった。水不足を克服すべく1954年に竣工^{しゅんこう}した「銅山川疏水事業」である。標高1200mを超える法皇山脈を貫通し宇摩平野に至る長大な導水トンネルを掘削し、約6km南を流れる内陸河川、吉野川水系銅山川にダムを建設、分水のうえ宇摩平野の工業用水を確保するというものである。良質の用水は、紙の和洋を問わず紙づくりの生命線であるが、降水量が少なく古くから旱魃^{かんばつ}に悩まされ続けてきた当地においては用水問題が長年の課題であった。地元住民の宿願であったこの疏水建設構想は、江戸末期の安政年間から明治・大正期にかけて地元^{じもと}の庄屋らによって何度も掲げられてきたが、資金難や水利権問題に幾度も行く手を阻まれ、その都度頓挫してきた。導水トンネル工事は1937年に着手されるも途中で太平洋戦争が激化し中断、戦後によりやく再開する。



OKADA Masaaki

1991年東京工業大学土木工学科卒。専門は景観工学、土木史。著書に「テクノスケープ」「日本の砒都」「美しい英国の産業景観」など。英国産業考古学会特別賞、日本都市計画学会石川奨励賞、日本造園学会賞、日本観光研究学会賞を受賞。



ABSTRACT

In many industrial cities, distinctive industrial landscapes (technoscapes) have been formed. Some have been sublimated as locally-attached landscapes and have created unique cultures. Industrial landscapes are reflections of local industrial history, and entity of natural and human geographical conditions, being significant icons of identity.

This article focuses on Shikokuchuo City, the typical paper and pulp industrial city, and quests for related industrial culture. It emerged with the completion of major civil engineering projects after WWII.

興味深いのは、機械すき和紙14工場が合同で1943年に設立した大王製紙の創業者、井川伊勢吉(1909～1990年)が疏水事業の実現に大きく貢献している点である。井川は紙づくりの傍ら、疏水事業を「第二の社業」と位置付け、銅山川の水利権をもつ徳島県と分水協定締結のため周旋するなど、不退転の決意をもって事業推進の原動力となった。そして1950年にはいよいよ通水式が挙行され、最初の構想以来約100年を経て峰の向こうの「黄金の水」がいよいよ宇摩平野にもたらされることとなったのである。

銅山川疏水事業は工業用水に加え、水力発電、農業用水、上水道にも供する重要なライフラインとなる。法皇山脈嶺南を流れる銅山川沿川に3基のダム(柳瀬ダム(1953年)、新宮ダム(1975年)、宮郷ダム(2000年)(写真2))が建設され、さらに山脈を貫通する分水隧道と導水路(写真3)を通して、北進した水は銅山川発電所で電力を供給し(写真3)、その余水は生活用水に利用された。ま



写真1 四国中央市の産業景観

た、用水を平野の細部に巡らすべく小規模の水路橋群が架橋され(写真4)、さらに既存の水田灌漑用溜池(土居池、新池(写真5))を工業用水の調整池に転用するなど、さまざまな工夫が施されている。

加えて、1967年には海岸部に外航船の専用埠頭をもつ近代港湾が整備され、大王製紙など紙・パルプ工場を中心とする巨大な臨海工業地帯が形成されていく。疏水建設と築港の工事費の多くを大王製紙が寄付・負担している点も特筆に値するだろう。港湾近接と豊かな工業用水の獲得は近代



写真2 銅山川ダム群。(左) 柳瀬ダム、(右上) 宮郷ダム、(右下) 新宮ダム

紙・パルプ産業のもたらした 個性的な地域文化

製紙業の理想的な立地条件であり、その下地となる基盤整備に対する投資は同社にとっても十分に回収が見込めるものだったのだ。実際、1957年のインタビューで井川伊勢吉は、疏水の水質に加え、燃料石炭主産地(北九州)および大消費地(大阪、神戸)への近接性を当地のもつ地の利として挙げている。困難な大事業を主体的に敢行し成功に導いた同氏の慧眼がここに光る。

この大事業が戦後の宇摩平野に著しい経済発展をもたらしたことは言をまたないが、同時にこの地に個性的な地域産業文化を生み出し、特有の風景を形成している。

疏水感謝祭と疏水公園

1953年の柳瀬ダム完成を記念し、発電所の東約100mの位置にある上柏町(旧上分村)に

「疏水神社」が建立された。付近には功労者を称える顕彰碑も設置され、周辺は当時の上分村村長によって疏水公園(戸川公園)として整備された。ここでは毎春「疏水感謝祭」(写真6)が地元の上柏公益会によって催されている。製紙産業や自治体の関係者ら約100名が疏水神社の神事に参列し、先人の遺徳をしのぶのだ。式典の後は恒例の

「もち投げ」が挙行され、多くの周辺住民が歓声を上げながら大きな盛り上がりを見せる。

また、1975年には市内の小高い丘陵地に位置する三島公園に、疏水組合歴代組合長5名のレリーフが施された「銅山川疏水事業功労者の頌徳碑」が建立された。その除幕式において、地元で三島町長を務め疏水組合長としても長くその実現に



写真3 銅山川発電所(左)と同水圧鉄管(右)



写真4 銅山川疏水水路橋群。岡の防水路橋(左)と山田川水路橋(右)



写真5
既存の水田灌漑用溜池を転用した新池調整池(竣工1923年・転用1975年)



写真6 疏水神社で開催される疏水感謝祭



写真7 四国中央紙まつり

現在まで市の中心部で「川之江パーカーニバル(現・四国中央紙まつり)」が開催されている(写真7)。毎夏、水とミツマタが会場内に設置された紙神社に奉納され、神事に続いて紙に関連するワークショップやステージイベント、紙製品の展示・即売会などが盛大に行われている。夜に

貢献した合田鶴太郎(1886~1979年)が「疏水音頭」なるものを披露したとの記録がある。「♪安政このかた思いを遂げて ながれながれて 宇摩の里(後略)」という歌詞に、参列した一味同心の井川伊勢吉らは感涙に浸ったという。ただ、頌徳碑の裏側に記された「頌徳の記」にもその記述はなく、地元での継承例も残念ながら現時点で確認できていない。

このように、疏水の守護神を祀った神社が神事や民謡とともに存在していたことは、その恩恵の大きさを端的に示す点でも注目に値するであろう。

紙漉唄と紙祭り

「唄」が残っている。「♪伊予の川之江清水が湧くよ、紙のよしあし水次第 ♪船が出ますよ川之江港、積んだ荷物は紙ばかり」というユニークなリズムは即興により制作されたもので、溜め漉きや叩解こうかいなどの単調な作業に弾みをつけ効率を向上させていたという。前述のビーターなどによる機械化が進む以前は早朝未明からこの唄が至るところで聞こえていたという。

また、1953年には川之江町制施行55周年を記念し「川之江音頭」が当時の町助役、三好弘光によって制作されている。町内の名物名所のほか「♪伊予の川之江 紙どころでも 人の情けは薄くない」という製紙関連の歌詞が含まれている。1974年には愛媛県にゆかりのある演歌歌手、松山恵子の歌でレコード化もされている。

また、1978年から

実施される「紙おどり」では「♪伊予の川之江紙どころ 紙はよいよい福の神」のはやしに合わせ参加者が情熱的に踊り続ける。

このほか、1988年の「紙のまち資料館」開館、小学校児童による手すき和紙の卒業証書作り、高校生が毛筆の美しさを競う「書道パフォーマンス甲子園」(2008年)、紙・パルプ産業観光と工場夜景ツアー(1997年)など、紙・パルプ産業から派生したさまざまなアクティビティが確認できる。これらには、産業都市特有の地域文化としての意義が認められるが、同時に、紙のまちを支える銅山川疏水への感謝、そして紙づくりという当地のアイデンティティを反映する生業に対する愛着と誇りが、祭事や民謡、教育などを通じて継続的に人々の心に摺り込まれ、強化されているものと考えられるだろう。

なお、このような「産業民俗」とも呼べるような独特の地域文化は日本特有の現象ではないかと考えている。今後も引き続き、国際的な学術交流などを通じて多角的な視点から研究を進めていきたい。

参考文献

- (1) 大王製紙50年史、1995年
- (2) 地方史研究協議会・日本産業史大系(7) 中国四国地方篇、東京大学出版会、1960年
- (3) 伊予三島市史下巻、1988年
- (4) 川之江市誌、1984年
- (5) 紙バ技協誌「大王製紙(株)三島工場」、1979年1月号、121~131頁
- (6) 四国中央市紙のまち資料館展示資料